

タイトル「ジュンレイ」
作者:あすかつぐよし

「序章」

進路相談の結果はそんなに悪くなかった。

僕の成績と、狙ってる大学の偏差値的には、特に問題はない、と担任の先生も、特に心配はしていない様子だった。ただ、最後に先生が言った言葉が、僕の心に小さなトゲを突き刺していた。

「来栖(くるす)……。大学行った先のビジョンがあまり無いのは、このクラスではお前ぐらいだぞ？成績はそんなに悪くないから心配はせんが。今からでも、少し将来何になりたいか、考えておいても良いんじゃないか？」

その時は、先生にも

「いやあ、大学でそれを考えられればなあ、って思ってたー！」

と、愛想笑いでごまかしたものの。家に帰ってからも、僕は部屋のベッドの上でその事を思い返しては、少し憂鬱な気分になっていた。

『俺……。やりたい事、全然見えてないじゃん……。？』

僕、来栖真実也(くるすまみや)、17歳の高校2年生。愛知県の某市にある普通の高校に通う、極めて普通の学生の僕。

特にボッチという訳ではない。高校のクラスメートとは、普通に何人かのつるむ友人がいるし、女子生徒ともそこそこ気楽に話をしている。

彼女はまだいた事ないけれど、彼女が欲しくて死ぬほどがつつくのは少し格好悪いと思っている。

僕……。普通ですよ？と、誰かに聞きたくなるぐらい、自分のことが分からない。そんな僕。

つるんでる友人達の中には、明確なビジョンを持っている者は結構いた。自分が所属している部活動の強い大学に行こうと考えている奴。

東京の大学に出て、自分の学びたい分野の勉強をしっかりとしたいと語る奴。

人生設計として、公務員を既に就職先に選んでいて、その為の勉強をしている奴。

バイトしながらでも、歌手の夢を叶える！なんてカラオケで大声で叫んだ同級生女子は、実はちょっと気になる子だったりして。

そんな中で、僕だけが「とりあえずこの大学に行く」としか決まってない。これは、やっぱり、少し焦るじゃないか。何かに！何というか人として！

しかし、いきなりやりたい事というのは、そんな簡単に見つかるものではない。

クリエイティブな才能なんて、全然ない。絵も文章も、歌も、どれも平均的な評価しかもらえない。

顔は、時々女子の友人には「真実也君、ちょっと女の子みたいで可愛いよね」とか言われるぐらいで、そこそこ悪くはないらしい。

が、それで、一角の者になれるとは、ちょっと思えない。

演技は、中学の文化祭の出し物で、演劇をやった時に、録画されていた動画を見て、自分の演技の下手さに3日ぐらい死にたくなつたぐらいだから、これもダメ。

スポーツは特に運動音痴という訳ではないけれど、物凄くハマってしまうスポーツがある訳でもない。

……。自分でも引くぐらい、やりたい事ないな、俺。引くわ。割と自分で自分に引くわ。

どこかの漫画みたいに、「絶望した！」と心の中で叫んでも、何か事態が好転する訳でもなし。

そして、僕は、それからの数日、悶々とした日々を過ごしたのだった。
とあるサイトで、とあるモノを見つけるまでは。

僕にも、一応の趣味はある。それはネットサーフィンだ。2ちゃんねるに書き込んだりはしないけれど、ニュース記事を読んだり、まとめ記事を読んだり。SNSで全然知らない人とコミュニケーションを取ったり。

一応、ツイッターなんかアカウントを取って、適度につぶやいている。何万ものフォロワーがいる訳ではないけれど、好きな漫画やドラマなんかの話で繋がってる人がそこそこいる。……結局、ここでも、僕は普通の事しかやってないんじゃないか？とは、ちょっと思うけれど。今は、SNSをスマートフォンで済ます同級生が多い中で、親から貰ったノートパソコンでちまちまやっている僕は、少しだけ自分が「普通の高校生」でない事を自覚できて嫌いじゃないのだ。

きっかけはフォロワーさんが、同じ東海地方の人で、知多半島の海産物のツイートをしていたのを見て、検索をかけた時だった。

ヒットした検索結果の、一番下の表示にそれはあった。

「知多半島四国八十八ヶ所巡り」

正直、頭の上に相当の「？」が浮かんだ。知多半島は東海地方の半島の名前である。高校生の僕でも、東海地方に住む人間の一人として、その事は当たり前の知識としてある。しかし、いきなり次に「四国」が着く。

「どっちだよ！」

と思わず突っ込んでしまった僕を誰も責められないと思う。

しかも、「八十八ヶ所」が後に続くのだ。一瞬、何かのオリエンテーリングで、知多半島から四国までの88箇所のチェックポイントに行くのか？などと思ってしまった。

しかし、更に検索を(既にその時には、最初に調べようと思っていた海産物の事は忘却の彼方に消え去っていた)続けている内に、これは「巡礼」と呼ばれる類の物だという事が分かってきた。

巡礼……宗教的な聖地などに参拝することなどを指して、イスラム教などではメッカ。キリスト教などではエルサレムなどが目的地として設定されるらしい。で、日本の場合は、「お遍路さん」などと呼ばれて「四国八十八箇所」巡りをしている人がたくさんいるらしい。

で、「知多半島四国八十八ヶ所巡り」である。HPには、こんな風を書いてあった。

『知多四国八十八ヶ所霊場とは

風光明媚な知多半島は、その昔、弘法大師(空海)が東国ご巡錫の途中に上陸された聖地であります。その折り、お大師さまは知多の風景があまりにも四国に似ていることに驚かれたそうです。

「西浦や 東浦あり 日間賀島 篠島かけて 四国なるらん」

この地で古くから詠われ、お大師さまと共に歩む全行程は 194 km あります。文化6(1809)年、妙楽寺(79番)住職亮山阿闍梨が、お大師さまの夢告により発願。四国に巡拝を重ねられ、岡戸半蔵・武田安兵衛両行者の協力を得て知多四国霊場を開創されました。

以来、年を重ねるごとにお大師さまのご霊徳を慕う人々が、広く全国から押し寄せるようになりました。また、数々の霊験談も後を絶ちません。知多では訪れる巡拝者のみなさんを「弘法さん」とよび、親しみを込めてお迎えしています。知多半島を一周する巡拝の旅は、いつでも、どこからでもお参りが始められます』(「知多半島四国八十八ヶ所巡り」HPより引用)

読んで、しばらく考えてしまった。えっと、これはつまり。四国に知多半島の景色が似てるから、「四国八十八箇所」巡りと同じような事を、知多半島で始めちゃったって事か！？
似てるから！って、そんなんが良いのか、知多半島！？

僕は、そんな風にして、出会ったのだ。「知多半島四国八十八ヶ所巡り」というモノの存在に。

「第二章 シラベル」

そこから、僕は、この巡礼について、ひたすら調べ始めた。

図書館にも出向いたが、今一つ、本としては出ていないようだ。

そして、ネットでの検索も、公式HP以上の情報が出てこない。今のこの時代に、ロクに経験談すら検索にヒットしないのだ！

「何か、霊的なプロテクトでもかかっているのだろうか？」

本気で、僕がそう思っている時に、少し面白い記述を発見する。東海地方の地方局「東海テレビ」に『ぐっさん家』という番組がある。

その中で、番組メインMCのぐっさんこと、山口智充さんがこの「知多半島四国八十八ヶ所巡り」をしていたのだ。そして、更にこの時の日曜日の『ぐっさん家』の再放送において、たまたま、実際にぐっさんが、この巡礼をする内容の回をやっていたのだ！

ぐっさんは、普通の洋服の上に、巡礼用の白い独特の服を着ていた。巡礼服、というのだろうか？

「もしかしたら、これを着ないと巡礼をしてはいけないのだろうか……？」

ぐっさんのその巡礼の様子の回は、やり始めてそこそこ回数を重ねていた時のようで、僕が求める情報があるとは言い難かった。でも、ぐっさんがその巡礼をしている様子は、何だか楽しそうだ。

「案外、簡単に出来るのかな……？」

そんな事をテレビの放送を見た僕は思ったが、やはり、どうにも情報が少ない。本当に、このネット情報が氾濫している中で、どのようにして、この巡礼を始めれば良いのか、肝心なところが今一つ分からないのだ。

その後も、かなり検索を地道にしていっていったのだが、答えは一つだった。

「これは、実際に始めないと何も分からないぞ……？」

僕は、学校が開校記念日である、11月の頭の平日。実際にこの巡礼を始めることにした。「知多半島四国八十八ヶ所巡り」の最初の寺、「曹源寺」の場所は、ネットにちゃんと情報がある。

行ってみるしか、分からないじゃないか。行ってみて、僕みたいな普通の小僧には出来ない、と言われたらそれまでだ。

「第三章 ハジメル」

その日の朝、僕は、母親に（平日だったので、父親は普通に既に出勤した後だった）、出かけてくることを伝えて家を出た。母は特に僕の行き先を聞かなかった。

「母さん、ちょっと出かけてくる。そんなに遅くならないと思うー」

この僕の言葉に母の返事はそっけない。

「ああ、行っといで。夕ご飯までには帰るんだよ」

もしかしたら、母は僕がまさか、こんな巡礼を始める、などという事を想像すらしてないかもしれない。ま、そりゃそうだろう。自分の息子が、まさか巡礼、などという物に興味をいきなり持つ事など、普通の親はまず想像すらしないはずだ。

地元の駅から、名鉄本線の「前後」駅まで、約40分ほどの時間がかかった。特急も止まらない、そんなに大きくない駅。急行は幸い止まるので、僕の最寄り駅からは乗り換えもしないで一本で行く事が出来た。

前後駅の改札を出て、すぐの所にファミリーマートがあり、その近くの階段を降りる。ロータリー？なのだろうか？に、しては今一つ道が広くないし、いきなりちょっと謎の空間が広がっている。

しかし、とにかく、ネットで見た地図からすると、線路と直角に進めば、「曹源寺」の方向に出ることが出来る筈なので、何はともあれ進んでみる。

ひたすら歩いていくと、ネット上で目印になっていたセブンイレブンを発見する。そこを左折して、直進すれば、「曹源寺」は見えてくるらしい。

その情報を信じて、歩を進めていくと、「曹源寺」の看板が見えてきた！

「わ、みつけた！良かった、たどり着けた」

そう一人ごちて、実際に寺の境内に入ってみる。

……………参拝してる人、いないな。見渡す限りで、境内にいるのは、僕一人だった。ざっと見渡すと、本堂とは別に、何か参拝をする場所があるらしい。

そこで、人がいる社務所(巡礼に関しては、納経所と言うらしいので、以降、この言い方で統一する)の窓口をとりあえず訪ねることにした。何しろ、ネットを見る限りで、この巡礼の始め方がさっぱり分からない。

幸い、納経所の窓口には、おじさんがいらっしゃったので、正直に聞いてみた。

「八十八ヶ所巡り、始めたくて来たんですけど……これってどうすれば良いんですか？」

おじさんは、こんな若造の僕にも、きちんと色々なことを教えてくれた。まず、おじさんは、パンフレットを一つ渡してくれた。これは、無料の物だった。

そこには、八十八ヶ所巡りに必要な、様々なグッズの説明があった。その中で、とりあえず必要なものは「納経帳」というものだけ、らしい。白衣などは、必須、という訳ではなくて、別に普通の格好で巡っても良いらしい。

「納経帳」は1500円と2400円のものがあり、お小遣いがそんなに潤沢にもらえている訳ではない僕は、迷わず1500円のを購入させてもらった。

更に、願い事を書いて、納める「上納札」というのが100枚で100円で買えるらしいので、これも買った。

さて、お参りだ。普通の寺院は本堂をお参りするだけで良いみたいだけれど(多分)、八十八ヶ所巡りの場

合は更にお参り必須のところがある。

八十八ヶ所巡りの全ての寺院に「弘法堂」という、弘法大師、つまり空海を祀るお堂があり、こちらにさっき購入した「上納札」に願いを書いて納める。

正直、この時まで「願い事」というのは特に何もなくて、この巡礼を始めてしまったので、最初は少し悩んでしまった。弘法堂に置いてあるベンチに座り、しばらく考えて、願い事を決めて、記入。奉納した。

そして、先ほどの納経所で、納経印を貰う。これで、僕は1番の巡礼が終わった訳だ。

後はひたすら、これを87箇所のお寺に行って(実際は、「番外」というのがあり、100近くになるらしい)、ひたすら印を貰う為に歩きまわると、いう訳だ。

「これを、後……87箇所……？」

この「曹源寺」に、前後の駅から来るのですら、15分もかかり、この時、秋にしては少し気温も高いこともあって、既に汗だくの僕。正直、一瞬気が遠くなった。

そして、少しこうも思った。

「いきなり始めちゃったけど……これ、全部僕に出来るのか？1600円も払って、結局中途半端になるんじゃないのか？」

そんな事が頭によぎってしまった。

しばらく、納経所の前で考えていたのだけれど、すぐ考えるのをやめた。そして、最初に納経所の販売物を見た時に、気になった一つの冊子を買う事にした。

お金は少し厳しいけれど、僕には必要なものだろう。「歩き巡拝知多四国めぐり(エリアマップ)」、これは1200円。今月のお小遣いはこれでほとんど無くなった。何かお金が必要になったら、貯金崩さないといけないな。

でも、僕が今から巡礼を始めようと思ったら、これが無くては多分、どうしようも無いと思う。実際に、今自分がある1番の「曹源寺」から、2番の「極楽寺」までの道順がかなり詳しく書いてある。

地図を見る限りでは、そんな遠くないように見える。そして、僕の歩いて行く「巡礼」がここから始まったのだ。

「第四章 メグル」

地図上からすると、そこまで離れていないように見えた、2番の「極楽寺」。

しかし、実際には、ここまでに到着するのに、軽く30分以上の時間がかかったのだ。周りを見ても、まるで人が歩いていない。「曹源寺」から「極楽寺」までの道のりにあるのは、大きな幹線道路と、工場施設ぐらい、それに僅かな民家。

先ほども書いたが、僕がこの巡礼を始めた日は、11月の頭だというのに、かなり気温が高めの日で、僕は自分が想像していた以上の汗をかくことになった。

「なんで……こんなに距離あるんだ？」

と、思ったが、これは、地図があくまで目安であり、縮尺が部分的に意図的に変えてあると気付いたのは、地図の注意書きを発見した時だった。正直、この時点で2番の「極楽寺」まで目指したことを軽く後悔していた。

「極楽寺」まで到着した時は、本当に「ようやく、何とかここまでたどり着いた！」と思ったものだった。

この「極楽寺」は、少し坂を登った先に本堂などがあり、僕もその坂を登っていく。開けた場所に出た時、数台の車があったのを見て

「普通の参拝者なのかな？」

と、思ったのだが、車の持ち主のおばちゃん達二人組は、やはり僕と同じように「納経帳」を持っていたし、弘法堂には、「上納札」を納めていた。間違いなく、巡礼をしている人達だ。

「車か……………ちくしょー、楽しやがって！巡礼は歩いてやるんじゃないのかよ！」

と、心の中で悪態をつく僕。それは、車の免許を持ってない年齢の僕の、ひがみ以上の意味は無いだろう。恐らく、僕も自分が車を乗り回す年齢になっていたとしたら、迷わずこの巡礼を車で行っていた可能性が高いからだ。

車での巡礼は勿論、禁止されてはいない。実際に、車で行く為のロードマップも、1番の「曹源寺」には売っていたぐらいだし。愛知県民はとにかく、車に乗ることが日常的過ぎる。その車社会の人間が、そう歩くことを選択するとは、やはり思いがたい。

まあ、そのおばちゃん達の事はともかくとして、僕はここの本堂と弘法堂をお参りし、「上納札」に、1番と同じ願いを書いて納め、「納経所」で納経印を貰う。

2番。まだ88個の内のわずか2番。それでも、僕は、この小さな歩の進みに、かなりの感激を覚えた。確かに、歩くのはちょっと大変で、歩いている時にはなんでこんな事してるんだ？とも思ったのも事実なのだが。

僕は、少しだけこの巡礼をしている人の気持ちが何となく分かったのだ。

「これは……思っているよりも楽しいかもしれない」

子供の頃、名鉄のポケモンラリーをやった経験のある、かつての少年だったら、この気持ちは理解してくれるかもしれない。ちょっとした、冒険。

僕が始めた理由は「これがどんな物かが分からないので、その実態を知りたい」という、かなり小さな動機と言える。けれど、僕はこの時既に、こう固く心に誓っていた。

「88箇所、制覇してやろうじゃん！」

そんな思いも新たに、3番の「普門寺」を目指す。しかし、ここは嬉しいことに、3番から4番までの距離はそう離れていない。

少し、足取りも軽く、目指す。5分も歩いただろうか。「普門寺」を現す石柱が立っていた。そこには、奥に入っていく道があり、そこから入るのか？と、その道を奥に向かって歩いてみる。

ところが、墓地などがあるものの、本堂らしきものが見えない。でも、それらしい建物が並んでいる方に入ってみると、本堂などがある開けた場所に出る事が出来た。

どうやら、僕が入ったのは、裏口のような物らしかった。と、そんな時に、大きな蜂が、僕の頭の上をぶ～ん、と飛び去っていく。あれだけでかい蜂に刺されたら、大変なことになりそうだ。

と、思ったら、お堂の一つに貼り紙がしてあって「ハチに注意！」と書いてある。いやはや、確かにあの大きさの蜂には注意が必要だよなあ、などと思いながら、本堂に進む。

そして、手順通りに、本堂、弘法堂をお参りする。弘法堂では、滑車ででかい数珠が連なっている不思議な物が天井からぶら下がっている。イメージとしては、ブラインドを上げ下げするヒモの数珠版とってくれば良いのではないだろうか。

数珠を引っ張ると、頂点まで行った数珠が下りてくる時に、下にある数珠に「すこーん」と当たる音が盛大に響き渡る。これは、ちょっと面白いものだ。恐らく、何かしらこの数珠をこうして回すことは、ご利益があるのだろうけれど。

最後に、「納経所」で納経印を貰う時に、そこにいたおばさんに「本当に、でっかい蜂がいるんですね」と、聞いてみると、「あら、本当？ちょっと前に駆除した筈なんだけど。あらやだ」という反応が返ってきた。

更に、納経印を押してもらった後に「若いのにえらいわねえ」と言われてしまう。

「いえいえ！大したことありませんし、始めたばかりですし！」

と、思わず恐縮してしまう。でも、こんな巡礼の寺での触れ合いって、何だか素敵だ。僕の祖母とそんなに変わらない年齢のおばさんと、お話をする機会なんて、日常、あまりないことでもあるし。

本堂を背にしてまっすぐに歩くと、この「普門寺」の正式な門があり、大きな道路に出ることが出来る。先ほどの石柱を過ぎて、もっと歩いていたら、ちゃんとこの門にたどり着くことが出来たのだろう。

ここで、僕は少し考えてしまった。3番まで来たけれど、この先の4番までの距離は、なかなか骨が折れる距離っぽいのだ。

しかし、である。3番まで来た道のりを引き返すとなると、これまたかなりの距離を歩くことになる。前後駅に戻るのには、ちょっと今の僕には、特にメンタル的に難しそうだ。

そうなると、タクシーを拾う、というのはあまり現実的ではない。そんなお金は僕にはない。

色々考えたが、4番の「延命寺」はJRの大府駅に近い。頑張って、「延命寺」まで行って、大府駅であれば帰れば良い。その方は、今来た道に戻るよりかは、まだ歩く距離は短いらしい。

少し、気合を入れなおして、僕はまた歩き始めることとした。この時、僕の目標地点は、4番「延命寺」ではなく、その手前にあるコンビニだった。

巡礼が、こんなにキツイものだとは思っていなかったし、一応普段持ち歩いている保温水筒には、家でも入れたお茶が入っていた。しかし、そのお茶も既に飲み干してしまっている。

水分補給はする必要がある。出来れば、道中にスターバックスでもあれば、そこで少し休憩が出来るのだけれど。最悪、喫茶店でもあれば、入ってしまった方が良くもな、などと考えながらとにかく歩みを進める。

そして、僕はこの4番に行く道の途中で、とある人との出会いを果たすことになる。

「第五章 デアウ」

4番「延命寺」に行く途中、僕はまずそこに行く前にコンビニに入ろうと思っていた。何しろ、喉がからっからだ。しかし、やはりこの3番から4番までの距離がなかなか骨が折れるものだった。

マップの記述を見ると1番から2番までの所要時間が45分、2番から3番が5分、3番から4番が30分、とある。1番から2番まで歩いたときは、まだ歩き始めで、そこまで体力が減ってなかった。

しかし、この3番からの道のりは体力がかなり減っている状態だったので、1番から2番までの道のりよりもずっと長く感じる。スマートフォンについている万歩計はそろそろ2万歩に到達しそうな数字を表示している。

家を出てから既に、2時間近くは歩いている。疲れもするというものだ。しかし、何とか、マップに表示されていたコンビニに到着。ドリンクを2本買い、1本はその場で全て飲み干して、もう1本の中身は水筒に入れ替えた。

歩きながら、ちびちびと飲んでいけば、何とか大府駅まではこの水筒に入っているドリンクの量で足りるだろう。

しかし、コンビニから、4番「延命寺」に行くまでが、マップの表示が少し不思議な感じで、僕は戸惑った。マップに書いてある目印の歯科医のところを左に曲がった後、一旦右に曲がりしばらく直進。しかし、またしばらくして右に曲がるのだ。

「ん？これ、行った後に、戻ることになるんじゃないのか？」

そんな疑問が湧きあがったのだが、頼みはこのマップしか無いのだから、記述通りに行くしかない。変にショートカットをしてたどり着けない、という事はやはり避けたい。

目印の歯科医を発見。その近くに喫茶店があって、ちょっと休憩も考えたが、先ほどコンビニでお金を使っ
てしまっている。自販機で買えば安く済むのに、そうしなかったのは、やはりお金が心もとないからで、コンビニの方が安いドリンクを売ってるからだ。

そんな僕に、今、喫茶店に入ってお金を使う余裕はない。大府駅に着けば、電車のICカードにまだ残額が残っているので、何とか帰れるだろうが、不測の事態がどんなタイミングで起こるか分からない。出来るだけ出費は抑えた方が懸命だろう。

この辺は、バイトもしていない、小遣いで暮らす高校生の悲しい性というべきかもしれない。

とにかく、歯科医の前を左折して、公園が見えたところで右折をしようと思った、その時。突然声をかけられた。

「君！君も巡礼やってる人？」

声の先には、20代ぐらいの女性だろうか？今日の比較的暖かい気候に合った、比較的薄着の……普通に可愛い人が立っていた。この人の顔写真を写して、誰かに見せた時に、『彼女はアイドルだ』と言ったら、大抵の人は信じるであろうレベルの顔。

「え？じゅんれい……、あ、はい、巡礼！やっています。知多半島四国八十八ヶ所巡り」

“ジュンレイ”という言葉の響きが、実際に発しているのを聞いた事がないので、一瞬、そのキーワードを耳にしても、頭が認識するのに、若干のタイムロスを要したのだ。でも、「巡礼」は、確かにネットで調べている時に何回も見た言葉だ。

「そのマップ持って歩いてる人、君が初めてだからさあ。次、4番行くところだよな？」

何だか、ぐいぐい来る人だな。最初は、そんな風に思ってしまった。でも、この暖かい陽気の中、ここまで歩いてきたのだろう。顔には、相当の汗が出ているのが見えた。

「そうです。次は……『延命寺』ですね。あなたもそうなんですか？」

マップを改めて開いて、そう答える僕に、彼女が更にぐいぐいと僕に話しかけてくる。可愛い顔なので、正直嬉しいけど。

彼女が言葉を発する度に、少しずつ距離を詰めてくるので、最初は5メートルほどだったのに、既にほぼ目の前、1メートルしか僕と彼女は離れていなかった。汗を相当にかいているであろう、彼女だが、ふんわりと良い匂いが僕の方に漂ってきた。

「そうなんだけどさあ！何か、この地図、ちょっと不思議な書き方してるじゃない？これ、行って戻ってるよね！」

どうやら、マップの表示について、僕が思った疑問と同じことを思ったらしい。彼女は続けてこう言った。

「もしかしたら、こんな道の行き方しなくても、たどり着けるかもしれないじゃない？だから、大体の方向に歩いたんだけど……今、自分がどこにいるのか分からなくなっちゃって」

最後の方は、どんどん声が小さくなる感じだった。要するに、この人は現在、若干迷子になっている、という事なのだ。

「多分、地図どおりに行くとしたら、この公園が目印の筈なんで、ここを右に曲がって、また、そこで右に曲がれば延命寺には辿り着ける筈ですよ」

と、僕が答えると、彼女はマップを上下左右にぐるぐると回転させて、しばらく考えた後に、

「ああ！ここに書いてある公園がこれの事か！」

と、急に叫んだ。どうやら、ようやく自分の現在地を把握したようだ。それにしても……この地図を上下左右に回転させて分かることがあるのだろうか？ちょっと謎ではある。

「で、君は？もう4番行っちゃったの？」

と、再び彼女が僕に声をかけてくる。

「あ、いえ。僕も今、4番を目指していたところなので……これからです」

そういうと、彼女は少し笑みを浮かべて、

「じゃ、あたしと一緒に御参りしましょうよ！」

と、元気に僕を誘ってきた。

「そうですね、お姉さんも、今日この知多半島四国八十八ヶ所巡り、始めたみたいですし。一緒に行くの、ちょうど良いかもしれませんね」

そんな訳で、マップの通りに、その公園が見えたところで右折して、しばらく歩いた後、更に右折すると、果たして4番の延命寺があったのだった。

「わー！ようやく会えた！延命寺ちゃん！」

彼女は、そう感激の思いを口にして、延命寺に到着したのを喜んでいた。僕達二人以外の参拝者はどうやらないようだった。

ここでも、いつものように、本堂、弘法堂をお参りして、弘法堂では「上納札」も納めて、納経所に二人で向かった。しかし、誰もいない。呼び鈴のようなボタンがあるので、それをとりあえず僕が押した。

すると、近くで着信音のようなモノが鳴っているのが聞こえた。この納経所のおばさんが、その着信音のような音を鳴らしながら、やってきたのだ。

「あれ、もしかして、この呼び鈴を鳴らすと、おばさんの携帯が鳴る仕組み……とかじゃないですよ？」

と、彼女がおばさんに聞く。僕も、「え？もしかして？」と、同じことを思ってしまった。

「ああ、そうですよ。これを押すとね、この電話が鳴るようにしてもらってるの。海外にいても、これが押されると、鳴るのよー」

と、おばさんはにこやかに僕達に教えてくれた。

「凄い！ちゃんと現代の技術にここだけ対応してる！！！」

思わず、僕達は驚いてしまった。ネットに、今一つやり方も書いてない。ローテクの塊のようなこの巡礼に、変なところで、最新技術が活かされているのだ。正直、僕はかなりびっくりした。

とにかく、僕達は、二人揃って納経印を貰った。これで、4番まで何とか終わったのだ。後、84箇所！

しかし、今日はこれまでとする事にした。マップには、更に6番7番の行き方が書いてあるが、大府駅の更に先の寺に行く気力が、僕には残っていなかった。

寺を出て、とりあえず大府駅へと向かう事にした僕だが、彼女はどのようにするのだろうか？

「お姉さんは、これからどうするんですか？まだ続けるんですか？」

と、僕が聞くと、彼女は何かに気付いた顔をした。

「愛！私、鷹乃愛(たかのあい)って言います。20歳、名古屋の大学に通う2年生です。えっと、君は？」

そうだ、確かに僕達は、まだお互いの名前を知らなかった。

「あ、僕は来栖真実也、と言います。高校2年生です、17歳」

そう、改めて名乗ると彼女はちょっとだけ感心したような表情を浮かべた。

「あー！真実也君、高校生かあ。若いだろうなあ、とは思ったけど、私と同じぐらいかなあ？って思ったんだけど……。でも、偉いね、若いのにこんな巡礼を始めるなんて」

「そんな、愛さんもそんなに僕と変わらない年齢じゃないですか。全然偉くないですよ。ただ、ちょっとネットで見つけて興味が出たから、今日、いきなり何となく始めちゃっただけです」

「真実也君、普通の高校生は、興味を持ったからって、巡礼いきなり始めたりしないもんだよ？」

と、コロコロと笑い始める愛さん。

「そういう愛さんだって、普通の女子大生は、巡礼をしたりなかなかしないんじゃないですか？そっちも偉いじゃないですか、普通に」

と、僕が少し反論すると。

「わたしー？わたしなんて、全然軽薄だよ！」

と、顔をブンブンと横に振って、否定する愛さん。

「今、“ご朱印ガール”って流行ってるの知ってる？しょこたんとかがやってる、神社とか巡って、ご朱印貰う奴。あれ、テレビで見て、そういうのちょっといいな、って何個かの神社でもらったりしたのがきっかけなの。全然偉くないんだよ」

どうやら、愛さんは、そのご朱印の事を調べている内に、この「知多半島四国八十八ヶ所巡り」を知り、やってみようと思ったのだそう。

彼女は、実家が三重県にあるらしくて、名古屋では、市内のアパートで一人暮らしをしているという。仕送りとバイトだけで生活しているので、お金のかからない、徒歩で出来るこの巡礼を始めるのは良いと思ったのだそう。あくまで趣味の一環として。

「あ、さっきの答え。これからどうするか。悪いけど、ちょっともう無理。これ以上出来れば歩きたくない。早くシャワー浴びたいぐらい。でも、とにかく大府駅まではあかし、行くわ」

そう、一通りのお互いの紹介が終わった後に、愛さんはそう答えた。どうやら、今日のスタートもゴールも、僕達はほぼ同じコースを辿ったことになる。前後駅から始めて、1番～4番までの納経印を貰い、大府駅でゴール。

僕と愛さんの「ジュンレイ」はこうしてスタート初日を終えたのだった。

愛さんとは、連絡先を交換して、「ジュンレイ」に行く時は、一緒に行くことを約束してその日は別れた。家に帰ってきた時には、夕飯がもうすぐ出来上がる、というそんな時間だった。

その日は、いつ寝たのか覚えていないぐらい、僕は疲れていて、何だか「泥のように眠る」というのを初めて経験したかもしれない。でも、僕の「ジュンレイ」はとにかく、今日、この日から始まったのだ。

「第六章 カナウ」

それから、僕と愛さんの「ジュンレイ」は、少しずつだが行われた。マップは、書いてある通りに行くと11回で全て回ることが出来るらしい。だが、それは既に、1回目の時点で途中で挫折している時点で、僕達は11回以上かかる事ははっきりしていた。

しかし、2回目からは少しお互い、準備をちゃんとして臨むことにした。歩きやすい格好とか、水筒は少し大きめのものを持っていくとか。そんな程度の準備だが、1回目で水が途中で無くなったのはやはり辛かった。

愛さんは、僕よりもずっとお金の余裕があるので、時々彼女は水筒に入れるドリンクを買ってくれたりした。

この「ジュンレイ」、僕が思っていたよりも、ずっとハイペースで消化していく事になった。毎月の親から貰うお小遣いだけで、色々な事をまかなう僕にとって、最も頭を悩ませるのは、何と言っても交通費だったのだ。

昔の本当の巡礼のように、完全に家から全ての道のりを歩きでやるのは、長期休みだったら、もしかしたら出来るかもしれないけれど(そうなると、野宿と違って話になってしまうのだろうか)。

こうやって、少しずつ行ける日に行く、というスタイルの場合は、どうしたって、電車などの公共交通機関を使わざるをえない。しかし、愛知県の公共交通機関の運賃は、僕にとってはいささか高い。

その中でも、日間賀島、篠島に関しては、僕だけだったら、もっと行くのに時間がかかっていたかもしれない。

僕達がこの二つの島にある37番、38番、39番の各寺に行く為に、定期高速フェリーを使おうと思ったでしょう。一日で行こうと思った場合、フェリーだけで2370円の料金がかかってしまう。

そのフェリーが出る「河和」の駅までに行く料金も、地元の駅からかかる費用は往復で軽く2000円以上は飛んでしまうのだ。合計で、5000円近くのお金は、貧乏な高校生が突然出せと言われるとそこそこ躊躇してしまうのだ。

だから、マップを最初見た時は「この島に行く為に、少しお金を貯めないと」と、思ったものだ。でも、愛さんが、僕達のこの「ジュンレイ」を進めていく内に、僕が交通費がそう簡単に出不せないと知った時。彼女は、それなら、とこう言った。

「真実也君、日間賀島と篠島は、ちょっと早めに行っちゃおう！その分は私、少し出すからさ！島、真実也君と私行ってみよう！」

テレビで、日間賀島なんかは『孤独のグルメ』で井之頭五郎さんが来たり、『ぐっさん家』のぐっさんが「日間賀島好き」を公言したりと、何かと話題になる島だ。愛さんも、まだ一度も行ったことのない、三河湾に浮かぶ二つの島、行ってみたいんだそうだ。

僕と行きたい、と言ってくれる愛さん。僕は、まだ彼女と恋愛関係にある訳ではない。僕は愛さんのことがかなり好きだ。何よりとても可愛らしくて、何のとりえもない僕にも優しくしてくれる、とても良い人だ。

こんな人と付き合えたら、どんなにか嬉しいだろうと、時々思ってしまう。でも、今のこの「ジュンレイ」仲間という関係は、少し崩したくない気もするのだ。僕が、彼女に好きだと告白してしまったら、この関係は終わってしまいそうな、そんな気がする。

何より、僕のことは「年下の弟クンキャラ」ぐらいにしか、愛さんは見ていない気がするのだ。

それでも、僕達は楽しく、この「ジュンレイ」を行っている。これを始めて上納札にずっと書いている僕の願いは、何だか全然叶う気配がないが、それでも、着実に88箇所コンプリートに向けて納経印は増えていく。

納経印が増えれば増えるほど、僕達二人の目標に近づいている気持ち、足を前に出す活力となる。

とにかく、僕達は日間賀島に、12月の頭にしては穏やかな日差しが気持ちの良い日に、到着した。37番「大光院」は、港から2分で到着する、かなり近い場所にあった。納経印もあつという間にゲットした。

無事に納経印をゲットして、上機嫌の僕達の前に、英語で話しかけてくる人達がいた。

「Excuse me？」

50代ぐらいだろうか？外国人の中年夫婦がそこに立っていた。愛さんは、「え？何？外国の人？」と、軽くパニックになっている。

「What's happen？」

とりあえず、僕が聞いてみることにした。僕が拙い英語を口にした途端、この中年夫婦達は明らかにほっとした表情を見せた。

アメリカから、旅行中のハミル夫妻である事を、彼らは僕に名乗った。彼らは、この島の東端に「恋人ブランコ」なる物があるのだが、それを見に行きたいのだが、どっちへ行ったらよいか、分からないという。

彼らは、既に歩いて西港から、この東港の付近まで来たのだが。ここまでの道のりで、まともに英語が話せる人がいなかったらしく、かなり困っているようだ。

とは言え、愛さんは大の英語アレルギーを豪語するほどの英語がダメな人。先ほども、大して難しくない、普通の声をかける言葉を彼らが口にしたただけなのに、パニックを起こしていた。

英語で会話することに慣れてない人間は、どうしても難しくない英語のフレーズが、難しく思えてしまうのだ。僕は特に学校の英語の成績が良い訳ではない。

だけど、実は、小学生の頃に数ヶ月だけ隣の家に、イギリスから来た家族が住んでいたことがあって、少しだけ英語に慣れているところがある。英語能力は決して高くないが、外国人アレルギーのようなものは克服している、と言っても良いかもしれない。

こちらは片言だし、少し話せると思われてしまったのか、途中からただ一と早口の英語でまくし立てる、旦那さんの方のハミルさんの英語とでは、意思の疎通がなかなか大変だった。

だが、何とか、彼らをその行きたい場所の「恋人ブランコ」まで送り届けることが出来た。ハミルさん達は、とても喜び、二人でブランコに乗っているところをデジカメで撮影していた。と、いうか、僕がシャッターを押したのだが。

とにかく、物凄く感謝をされてしまった。ハミルさん達は、このままぐるっと島を一周するという。僕達は、この納経印を手に入れたらすぐに次の篠島へと向かうつもりだったので、そこで別れることとなった。

「Thanks a lot ! Mamiya ,Ai !」

そう笑顔で、こちらにいつまでも手を振っているハミルさん夫妻。再び二人だけになった僕達だが、ハミルさんが見えなくなったら、愛さんは僕にこう言ってきた。

「真実也君、凄いじゃない！英語喋れるんだ！！」

「いやいや！全然！あんなの喋られる内に入りませんよ。片言だし、全然聞き取れないし……」

そう答える僕に、愛さんは肘をぐりぐりと、僕の横腹に押し付けてきた。

「でも、私よりかはずっと凄いよ！真実也君、ちょっと格好良かったよ！」

「！？」

愛さんのその言葉に、か～っと顔が赤くなっているのが分かる。うわ、すっごく嬉しい！今まで、愛さんからそんな褒め言葉を言われたことなどないからだ。

「でも、良かったよね。真実也君のおかげで、ハミルさん達、自分達が目的のところに行けたもん。ハミル君はあの人達を助けたんだよ」

「そんな！大げさな……」

本当に、僕は大事な事をしてる訳では、全然ないのだ。せめて、もう少し英語力があれば、ああいう時にもっと力になってあげられるのに。そう思った僕は、その時気がついたので。

「繋がった！！！！……叶った！願い事！」

突然、でかい声でそんな事を口にする僕を、かなりびっくりした顔をする、愛さん。

「どうしたの？真実也君？願い事……って？」

ちょっとだけ、心配そうな愛さんの表情。僕は愛さんに向けて、笑顔を見せて。

「それはね——」

「終章」

それから、3ヶ月ほどして、高校3年生になるちょっと前に、僕達の「ジュンレイ」は終わる事となった。無事に、88箇所納経印を全て集め終わった。

僕達の最後の納経印を貰った後、愛さんは僕に告白をしてくれた。彼女の願いは「素敵な彼が出来ますように」だったのだ。勿論、僕は彼女の願いをその場で叶えてあげることにした。

僕は、将来、英語を活かせる職業に就く。出来るだけ、日本に来る外国人を手助けできるような、そんな仕事に。その為に、英語の教育に力を入れている大学を目指すことになった。

大学に入るまでに、出来るだけTOEICの点数を上げるつもりだし、ハミルさんの所に愛さんと一緒に遊びに行く事も考えている。

そんなちょっと未来の話をしている時、少しだけ過去を振り返った。あの時、僕は愛さんにこう告げたのだ。

「それはね、やりたい事が見つかりますように、だよ！今、見つかったんだ！やりたい事！！」

THE END